

# 大学新生の拒否不安が友人関係への動機づけと 友人関係の活動に与える影響について

The effects of sensitivity to rejection of university freshmen students  
on friendship motivation and activity

中 脇 禎 紀\*      新 川 貴 紀\*\*  
Yoshinori NAKAWAKI      Takanori SHINKAWA

## I 問題と研究史

### 1. 問題

学校基本調査（文部科省，2012）によると，大学・短期大学への進学率は53.6%と高い数値を維持している。大学の入学試験も，推薦入試からAO入試などいわゆる学力試験を受けないで入学する学生が4割を超え，学力の格差や大学への進学動機も含めて，大学生の質の変化が指摘されている（増田，2012）。

学生の質の変化の中でも，近年においては，大学生における不適応の増加が報告されてきている。これまでの大学生の不適応の問題として指摘されてきた大量留年やスチューデントアパシーに加えて，中学生・高校生を中心に見られるような不登校を中心とする不適応状態が大学生レベルまで拡大している（山田，2006）。藤井（1998）は，そういった最近のスチューデントアパシー，就職恐怖・卒業恐怖，卒論恐怖・修論恐怖，触れ合い恐怖などといった不適応の背景には大学生の精神的未熟さと同時に“不安”が存在していると述べている。

特に大学新生生において，そうした不安は顕著となる。例えば山田（2006）は，大学入学を果たしたという思いもつかの間，履修登録や高校とは異なる大学の仕組みの理解，講義出席と課題遂行，前期試験，そして新学期の開始など多くのストレスサーに対処しながらスケジュールをこなしていくことは困難な課題となり，この入学時が大学適応への重要な時期であることを指摘している。また，大学新生生が感じる不安の中でも，友人関係の不安は大きいものである。

『学生生活白書2011』によれば，22.1%の大学新生生が友人等の対人関係に不安を感じていることが示されている。前回（14.8%），前々回（8.0%）から上昇を続けており，友人関係への不安についての問題は重要なものであることが考えられる。大学新生生にとって友人関係は不可避であり，誰も不安を感じ得ることが予想される。そこで，本研究では，大学新生生が友人関係に対する不安を感じつつも，友人関係を獲得していく過程に着目して研究を行う。

\*北翔大学大学院人間福祉学研究科臨床心理センター

\*\*北翔大学教育文化学部心理カウンセリング学科

## 2. 青年期における友人関係の重要性について

青年期においては、親密な友人関係が重要な役割を果たしている。内閣府が実施している世界青年意識調査によると、日本の18歳から24歳までの青少年が学校に通うことの意義として「友情をはぐくむこと」を挙げる割合が65.7%と多い（内閣府政策統括官，2009）。西平（1973）によると、青年は親密で内面を開示するような関係を通し、新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されると指摘している。岡田（2007）の研究によると、内面的な友人関係を取る青年は病理的的自己愛や境界性人格障害傾向が低く、自尊心感情が高いという結果を示している。これらのことから、友人と親密で深い関係を築くことが望ましいと考えられる。しかし、一方で、相手とのかかわりを表面的なままにとどめている青年の特徴（千石，1985）や、状況に応じて自己や付き合い合う相手を切り替える傾向（大谷，2007）が指摘されている。また、子ども生活実態基本調査によると、中学生や高校生は仲間はずれにされないように話を合わせることや、それができない状況では疎外感や孤独感をもたらすことが明らかとなっている（Benesse教育研究開発センター，2010）。これらのことから、希薄な友人関係は親密な友人関係に比べてストレスフルなものであると考えられる。以上のような友人との付き合い方の違いには、友人関係を獲得する動機づけの違いによって説明することが可能なのではないかと考えた。

## 3. 友人関係への動機づけについて

岡田（2005）は、Ryan & Deci（2000）をもとに自己決定理論の観点から友人関係の形成について考えている。自己決定理論では、自己決定性の程度から大別して、①外的な報酬や他者からの働きかけによって行動が開始される“外的理由（external reason）”，②不安や義務の感覚から、あるいは自己価値を維持したいために行動する“取り入れ的理由（introjected reason）”，③個人的に重要であるからといった理由で自発的に行動がなされる“同一化的理由（identified reason）”，④ポジティブな感情によって動機づけられる“内発的理由（intrinsic reason）”に分けられている。

学生は様々な動機づけから友人形成のための働きかけを行うことが考えられる。「同一化的理由」や「内発的理由」に関わりある友人関係は、親密さなどに基づく友人関係であると考えられる。一方で、「外的理由」や「取り入れ的理由」に関わる友人関係は、近年、指摘されている希薄な友人関係に対応していると考えられる。

では、「外的理由」や「取り入れ的理由」などの動機づけの背景にはどのような要因が存在しているのだろうか。近年、指摘されているような自分自身や他者を傷つけるのを恐れる青年の特徴（千石，1985）のように、友人関係への動機づけの背景には拒否不安が影響を与えているのではないかと考えた。

## 4. 拒否に対する恐れが青年の友人関係に与える影響について

近年、指摘されている希薄な友人関係しか築くことができない青年の要因として拒否に対す

る不安が考えられる。杉浦（2000）は、青年期の友人関係には「拒否不安」が存在すると指摘している。「拒否不安」とは「分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し、他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ不安」と考えられている（杉浦，2000）。このような不安は、親密な友人関係を獲得するための行動を抑制することが考えられる。他にも、対人関係の不安は、自己呈示といったコミュニケーション行動を抑制することにつながりやすいことが示されている（菅原，1992）。

しかし一方で、角尾（2004）が大学生を対象に行った面接調査によると、「友達」はリラックスできる関係であると同時に、不安を喚起しうる関係でもあること。そして、不安を感じながらも「話題を見つけようとする」、「会話がなくなることを避ける」といった積極的な関わりを持つようとしていることなどが見出されていた。

これらを踏まえた上で大学新生について考えてみると、新しい環境での友人関係を形成するにあたって、周囲に自分の存在を拒まれずに受け入れられるかどうかといった拒否に対する不安が存在し得ることが予想される。そして、4年間の大学生活を送るためには友人の存在は不可欠なものであるため、そのような不安を感じながらも友人関係を形成しようとする動機づけを持つのではないかと考えられる。

例えば、「自分が受け入れられるかどうか不安であるが、友人を作らなければこの先の4年間で心配である」といったように、「拒否不安」といった要因が「取り入りの理由」のような動機づけに影響を与えているのではないかと考えた。

以上のことから、拒否不安が友人関係への動機づけに影響を与えていることが考えられる。特に入学直後の大学新生は拒否不安を感じやすく、新しい友人関係を形成するために何らかの動機づけを持つのではないかと考えられる。本研究では、拒否不安を「分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し、他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ不安」と定義し、拒否不安が種々の友人関係への動機づけにどの程度、影響を与えているのかを検討する。特に入学直後の4月に感じうる、拒否不安に着目して研究を行う。

## 5. 大学新生の友人関係の活動的側面と形成される友人関係の様態について

友人関係は既に形成されたものとして存在しているのではなく、個人が友人に働きかけ、相互作用を行うことで展開していくものであると考えられる。大坊（1993）は、自己開示が親密な友人関係に影響を与え、自己開示や向社会的行動は自身の行動に対して相手から同等の行動が返されるという返報性や相互性という特徴があることを指摘している。このことから、学生個人が友人に対して働きかけることで相互作用が生じ、その結果として親密な友人関係が形成されることが想定される。

青年期は親密で内面を開示するような関係を通し、新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されるとされている（西平，1973）ことから、形成された友人関係の様態についても検討する必要性が高いと思われる。そこで、本研究では親密な友人関係に寄与する活動的側面から、

形成される友人関係の様態について検討していく。

本研究では、大学新生生に対して友人関係への不安を感じつつも、親密な関係を築くことができるという知見を得ることを目的に検討を行なう。研究1では、3回に渡る時期別の調査を行い、大学新生生の友人関係への動機づけ、拒否不安、友人関係の活動的側面との間の関連を明らかにする。研究2では、入学直後の拒否不安が友人関係への動機づけと友人関係の活動的側面に与える影響について検討を行う。

## II 研究1

### 1. 目的

大学新生生を対象に3回に渡る時期別の調査を行い、友人関係への動機づけ、拒否不安、友人関係の活動的側面の間の関連を明らかにすることを目的とする。

### 2. 方法

調査時期 第1回調査2014年4月(T1)、第2回調査2014年7月(T2)、第3回調査2014年10月(T3)であった。

調査対象者・調査手続き 北海道私立大学の大学1年生対象に質問紙調査を実施した。質問紙を講義時間の一部を利用して配布し、その場で回収した。T1は290名(男性178名、女性112名)、T2は222名(男性131名、女性91名)、T3は112名(男性39名、女性73名)であった。

(1) 友人関係への動機づけ尺度：岡田(2005)が作成した友人関係への動機づけ尺度を用いた。「外的」、「取り入れ」、「同一化」、「内発」の4因子、全16項目から構成されている。「なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか?以下の質問に対して、最も当てはまる番号を項目ごとに1つだけ選んで記入してください」という教示を与えた後、それぞれの理由について“あてはまらない”から“あてはまる”の5段階評定で回答を求めた。

(2) 拒否に対する不安を測定する尺度：杉浦(2000)が作成した親和動機尺度の「拒否不安」因子の尺度を用いた。全9項目から構成されている。「以下の質問に対して、最も当てはまる番号に丸を記入してください」という教示を与えた後に、それぞれの質問項目に対して“あてはまらない”から“あてはまる”の5段階評定で回答を求めた。

(3) 友人関係の活動的側面尺度：榎本(2003)が作成した友人関係の活動的側面尺度を用いた。「相互理解活動」、「親密確認活動」、「共有活動」、「閉鎖的活動」の4因子、全29項目から構成されている。「学科内の友人と、以下の質問のようなことをどの程度行っていますか?当てはまる番号に丸を記入してください」という教示を与えた後に、それぞれの質問項目に対して“まったくしない”から“とてもよくする”の6段階評定で回答を求めた。

※拒否不安はT1とT3のみに測定した。

### 3. 結果

#### ① 友人関係の活動的側面尺度の検討 (Table 1)

榎本 (2003) の友人関係の活動的側面尺度29項目に対して因子分析を行った (主因子法・プロマックス回転)。負荷量が .30以下である項目と、.30以上の二重負荷のある項目を除外した結果、最終的に16項目の2因子が妥当であると判断した。第1因子は、榎本 (2003) と同様に、「相互理解活動」の7項目が確認された。第2因子は、「テレビ番組の話をする (.85)」、「一緒に勉強する (.56)」など9項目で親密的で友人と遊ぶことを中心とした付き合い方を示すもので「親密共有活動」因子と命名した。

#### ② 期間別の記述統計量と信頼性係数 (Table 2, Table 3)

期間別各尺度の記述統計量および平均値、標準偏差、最小値、最大値の結果を Table 2 に示す。期間別各尺度の信頼性係数を Table 3 に示す。

Table 1 友人関係の活動的側面尺度の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	F 1	F 2
F 1 : 相互理解活動		
3 : 将来についての話をする	.92	-.10
1 : これからの生き方や人生観などについての話をする	.90	-.06
4 : お互いの欠点や長所の話をする	.82	.08
2 : 自分の性格や行動についての話をする	.74	-.02
8 : お互いに不満に思っている点を言い合う	.72	-.04
5 : 意見が違うときに納得するまで話し合う	.72	.80
7 : 自分の趣味についての話をする	.35	.19
F 2 : 親密共有活動		
15 : テレビ番組の話をする	-.21	.85
16 : 好きなタレントや歌手の話をする	.07	.66
19 : お互いの家で一緒に遊ぶ	.01	.65
20 : 何となく家に集まって時を過ごす	.04	.65
13 : 一緒に登下校する	-.10	.64
14 : 一緒に勉強する	.04	.56
21 : 休日に出掛ける	.23	.56
26 : カラオケに行く	.06	.50
9 : トイレに一緒に行く	.24	.46
因子間相関 F 1	—	—
F 2	.51	—

Table 2 期間別各尺度の記述統計量

	期間	平均値	標準偏差	最小値	最大値
外的	T 1	6.15	2.79	4	20
	T 2	6.76	3.18	4	20
	T 3	7.11	3.26	4	20
取り入れ	T 1	12.02	4.46	4	20
	T 2	11.95	4.22	4	20
	T 3	11.99	3.92	4	20
同一化	T 1	17.67	3.29	4	20
	T 2	17.45	3.42	4	20
	T 3	15.99	4.52	4	20
内発	T 1	18.64	2.87	4	20
	T 2	18.46	3.04	4	20
	T 3	16.89	4.01	4	20
拒否不安	T 1	27.07	8.86	9	45
	T 3	26.39	8.35	9	45
相互理解活動	T 1	23.34	7.91	7	42
	T 2	25.16	7.39	7	42
	T 3	25.64	7.23	7	42
親密共有活動	T 1	30.67	7.03	9	54
	T 2	31.19	9.15	9	54
	T 3	29.4	10.36	9	54

T 1 : n=290 (男性178名, 女性112名) T 2 : n=222 (男性131名, 女性91名)

T 3 : n=112 (男性39名, 女性112名)

Table 3 期間別各尺度の信頼性係数

	期間	$\alpha$
外的	T 1	.82
	T 2	.84
	T 3	.87
取り入れ	T 1	.80
	T 2	.81
	T 3	.84
同一化	T 1	.79
	T 2	.79
	T 3	.84
内発	T 1	.80
	T 2	.80
	T 3	.84
拒否不安	T 1	.90
	T 2	.90
相互理解活動	T 1	.81
	T 2	.82
	T 3	.83
親密共有活動	T 1	.85
	T 2	.84
	T 3	.86

③ 各時期間の各変数の平均値の差 (Figure 1)

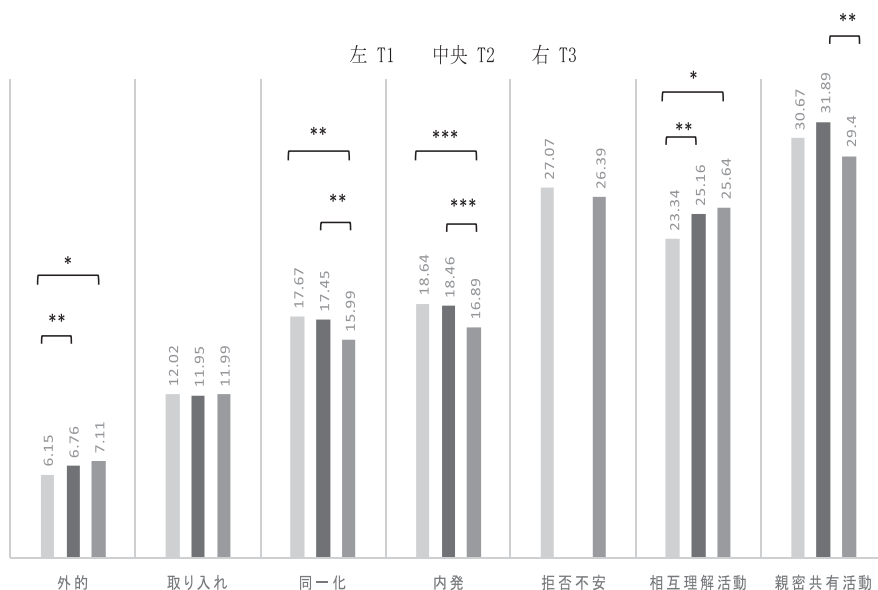
T1, T2, T3の間の各尺度の得点を, 対応のあるt検定によって比較した。その結果, 外的 (T1) と外的 (T3) では, 外的 (T3) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = -2.56, p < .05$ )。外的 (T1) と外的 (T2) では, 外的 (T2) の得点の方が有意に高かった ( $t(221) = -2.74, p < .01$ )。

同一化 (T1) と同一化 (T3) では, 同一化 (T1) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = 3.56, p < .01$ )。同一化 (T2) と同一化 (T3) では, 同一化 (T2) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = 3.30, p < .01$ )。

内発 (T1) と内発 (T3) では, 内発 (T1) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = 4.44, p < .001$ )。内発 (T2) と内発 (T3) では, 内発 (T2) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = 3.90, p < .001$ )。

相互理解活動 (T1) と相互理解活動 (T3) では, 相互理解活動 (T3) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = -2.71, p < .05$ )。相互理解活動 (T1) と相互理解活動 (T2) では, 相互理解活動 (T2) の得点の方が有意に高かった ( $t(221) = -2.94, p < .01$ )。

親密共有活動 (T2) と親密共有活動 (T3) では, 親密共有活動 (T2) の得点の方が有意に高かった ( $t(111) = -2.60, p < .05$ )。



Note 1. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Figure 1 各時期間の各変数の平均値の差

Table 4 友人関係への動機づけと拒否不安との間の相関係数

	時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1 外的	T1	—													
	T2	.14*	—												
	T3	-.06	-.06	—											
4 取り入れ	T1	.38***	.03	-.02	—										
	T2	.01	.27***	.07	.03	—									
	T3	-.20	-.22*	.29**	-.07	-.16	—								
7 同一化	T1	-.22	.05	-.03	.18**	.04	.03	—							
	T2	.06	.25***	-.00	.06	.25***	-.06	-.05	—						
	T3	-.16	.03	-.21*	-.03	-.08	.43***	.14	-.08	—					
10 内発	T1	-.33***	.04	-.03	.07	.04	.00	.76***	-.02	.23*	—				
	T2	-.02	.19**	-.00	-.06	.19**	-.03	-.03	.85***	-.08	.02	—			
	T3	-.03	.11	-.33***	-.10	-.06	.32**	.10	-.02	.80***	.17	-.00	—		
13 拒否不安	T1	.25***	.02	.06	.59***	.02	.02	.15	.01	.02	.08	-.02	-.05	—	
	T3	-.17	-.32	.15	-.06	-.06	.53***	-.02	.11	.20*	.02	.11	.13	-.04	—

Note 1. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

#### ④ 友人関係への動機づけと拒否不安との間の相関係数 (Table 4)

取り入れ (T1) と拒否不安 (T1) との間に有意な中程度の正の相関が認められた ( $r = .59$ ,  $p < .001$ )。取り入れ (T3) と拒否不安 (T3) との間に有意な中程度の正の相関が認められた ( $r = .53$ ,  $p < .001$ )。

#### ⑤ 友人関係への動機づけと友人関係の活動的側面との間の相関係数 (Table 5)

同一化 (T3) と相互理解活動 (T3) との間に有意な中程度の正の相関が認められた ( $r = .45$ ,  $p < .001$ )。同一化 (T3) と親密共有活動 (T3) との間に有意な中程度の正の相関が認められた ( $r = .48$ ,  $p < .001$ )。

内発 (T1) と親密共有活動 (T1) との間に有意な弱い正の相関が認められた ( $r = .31$ ,  $p < .001$ )。内発 (T3) と相互理解活動 (T3) との間に有意な中程度の正の相関が認められた ( $r = .44$ ,  $p < .001$ )。内発 (T3) と親密共有活動 (T3) との間に有意な中程度の正の相関が認められた ( $r = .43$ ,  $p < .01$ )。

#### ⑥ 拒否不安と友人関係の活動的側面との間の相関係数 (Table 6)

拒否不安と友人関係の活動的側面との間には相関が認められなかった。



Table 5 友人関係への動機づけと友人関係の活動的側面との間の相関係数

	時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1 外的	T 1	—																	
	2	.14*	—																
	3	-.06	-.06	—															
4 取り入れ	T 1	.38***	.03	-.02	—														
	5	.01	.27***	.07	.03	—													
	6	-.20	-.22*	.29**	-.07	-.16	—												
7 同一化	T 1	-.22	.05	-.03	.18**	.04	.03	—											
	8	.06	.25***	-.00	.06	.25***	-.06	-.05	—										
	9	-.16	.03	-.21*	-.03	-.08	.43***	.14	-.08	—									
10 内発	T 1	-.33***	.04	-.03	.07	.04	.00	.76***	-.02	.23*	—								
	11	-.02	.19**	-.00	-.06	.19**	-.03	-.03	.85***	-.08	.02	—							
	12	-.03	.11	-.33***	-.10	-.06	.32**	.10	-.02	.80***	.17	-.00	—						
13 相互理解活動	T 1	.03	-.04	-.02	.07	-.14*	-.12	.03	-.04	-.20	.22***	-.02	.01	—					
	14	-.01	-.00	-.11	-.02	-.09	-.03	-.03	.33**	-.11	-.01	.23**	-.11	.04	—				
	15	-.10	.05	.02	-.10	-.12	.21*	.09	-.21	.45***	.20*	-.20	.44***	-.06	-.07	—			
16 親密共有活動	T 1	.03	-.09	.11	.04	-.09	.07	.00	.10	.01	.31***	.11	.04	.45***	.00	-.08	—		
	17	.00	-.07	-.07	-.11	-.00	.05	-.03	.33	.05	-.01	.31	.09	.01	.49***	-.10	-.01	—	
	18	-.03	-.06	-.05	-.20*	-.17	.23*	.03	-.05	.48***	.13	-.05	.43***	-.01	-.01	.55***	.10	-.03	—

Note 1. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 6 拒否不安と友人関係の活動的側面の間の相関係数

	時期	相互理解活動			親密共有活動		
		T 1	T 2	T 3	T 1	T 2	T 3
拒否不安	T 1	.03	-.03	-.06	.01	-.08	-.15
	T 3	-.18	-.14	.01	.09	.08	.06

Note 1. \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### Ⅲ 研究 2

#### 1. 目的

入学当初における拒否不安が、友人関係への動機づけと友人関係の活動的側面の変化に与えている影響を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 方法

調査時期 第1回調査2014年4月(T1)、第2回調査2014年7月(T2)、第3回調査2014年10月(T3)であった。

調査対象者・調査手続き 北海道私立大学の大学1年生対象に質問紙調査を実施した。質問紙を講義時間の一部を利用して配布し、その場で回収した。T1からT3にかけて継続し、有効回答者となった59名(男性22名、女性37名)を分析の対象とした。

調査内容 研究1と同様の質問紙を用いた。

※拒否不安はT1とT3のみに測定した。

### 3. 成長曲線モデル (Growth Curve Modeling) の結果

#### ① 不安外的の切片と傾きに対する拒否不安 (T1) の影響 (Figure 2)

T1からT3にかけての外的の切片と傾きに対して拒否不安 (T1) が及ぼす影響を検討した (Figure 3)。切片に対する拒否不安 (T1) の影響は.12であり ( $p < .10$ )、傾きに対する影響は-.08であった ( $p < .05$ )。したがって、全大学新生の平均拒否不安 (T1) よりも高い大学新生のT1における平均外的は.12多く、外的の伸びは3ヶ月あたり-.08少なくなると考えられる。

#### ② 取り入れの切片と傾きに対する拒否不安 (T1) の影響 (Figure 3)

T1からT3にかけての取り入れの切片と傾きに対して拒否不安 (T1) が及ぼす影響を検討した (Figure 4)。切片に対する拒否不安 (T1) の影響は.31であり ( $p < .001$ )、傾きに対する影響は-.11であった ( $p < .01$ )。したがって、全大学新生の平均拒否不安 (T1) よりも高い大学新生における平均取り入れは.30多く、取り入れの伸びは-.10少なくなると考えられる。

#### ③ 同一化の切片と傾きに対する拒否不安 (T1) の影響 (Figure 4)

T1からT3にかけての同一化の切片と傾きに対して拒否不安 (T1) が及ぼす影響を検討した (Figure 5)。切片に対する拒否不安 (T1) の影響は.01であり、傾きに対する影響は.06であったが、どちらも有意ではなかった。

#### ④ 内発の切片と傾きに対する拒否不安 (T1) の影響 (Figure 5)

T1からT3にかけての内発の切片と傾きに対して拒否不安 (T1) が及ぼす影響を検討した (Figure 6)。切片に対する拒否不安 (T1) の影響は.01であり、傾きに対する影響は.03であったが、どちらも有意ではなかった。

#### ⑤ 相互理解活動の切片と傾きに対する拒否不安 (T1) の影響 (Figure 6)

T1からT3にかけての相互理解活動の切片と傾きに対して拒否不安 (T1) が及ぼす影響を検討した (Figure 7)。切片に対する拒否不安 (T1) の影響は-.10であり、傾きに対する影響は.02であったが、どちらも有意ではなかった。

#### ⑥ 親密共有活動の切片と傾きに対する拒否不安 (T1) の影響 (Figure 7)

T1からT3にかけての親密共有活動の切片と傾きに対して拒否不安 (T1) が及ぼす影響を検討した (Figure 8)。切片に対する拒否不安 (T1) の影響は-.19であり、傾きに対する影響は.10であったが、どちらも有意ではなかった。

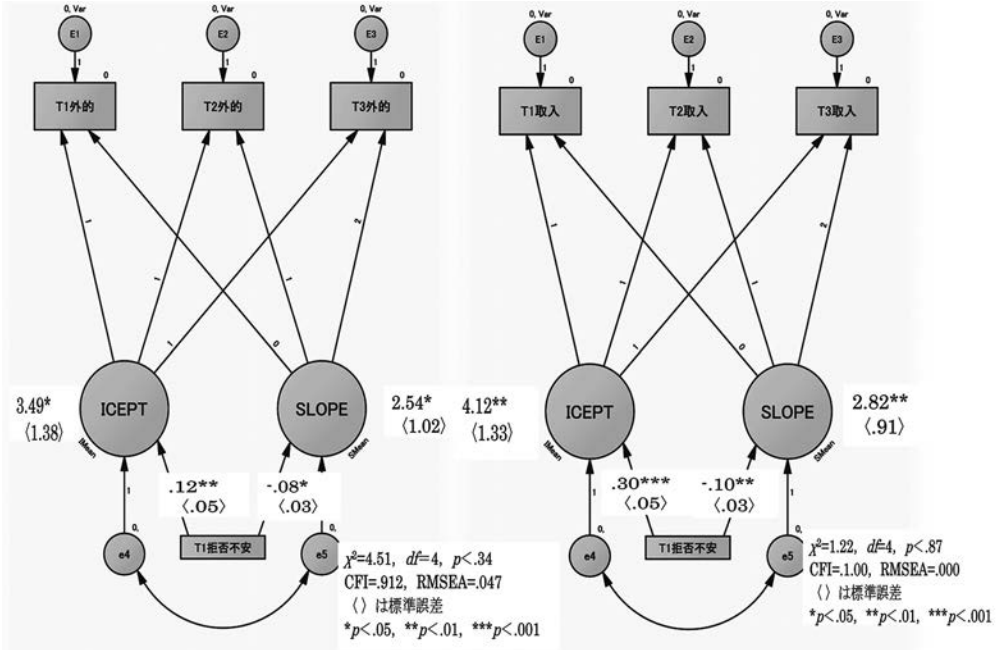


Figure 2 外的の成長曲線モデル

Figure 3 取り入れの成長曲線モデル

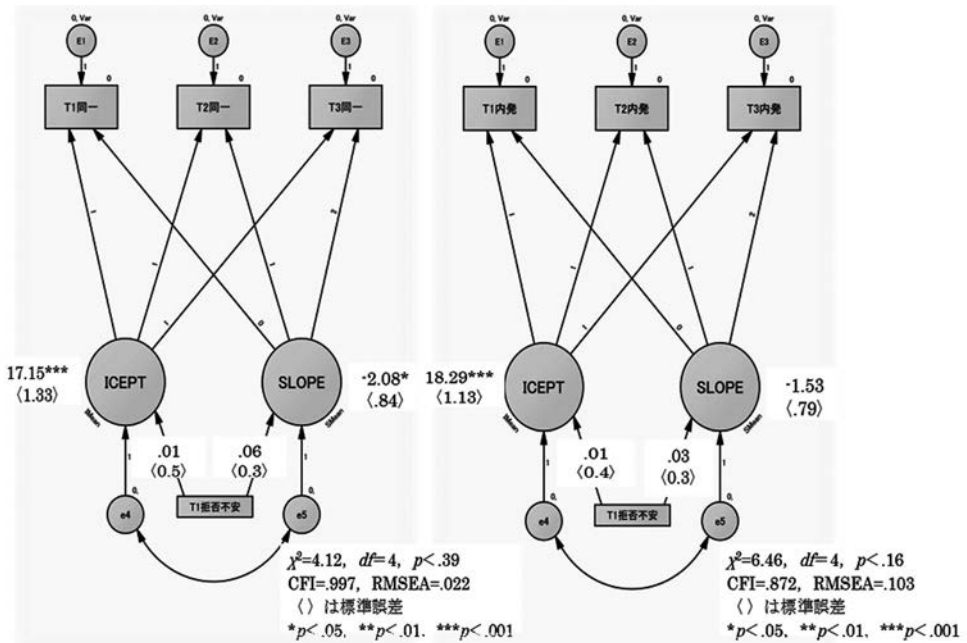


Figure 4 同一化の成長曲線モデル

Figure 5 内的の成長曲線モデル

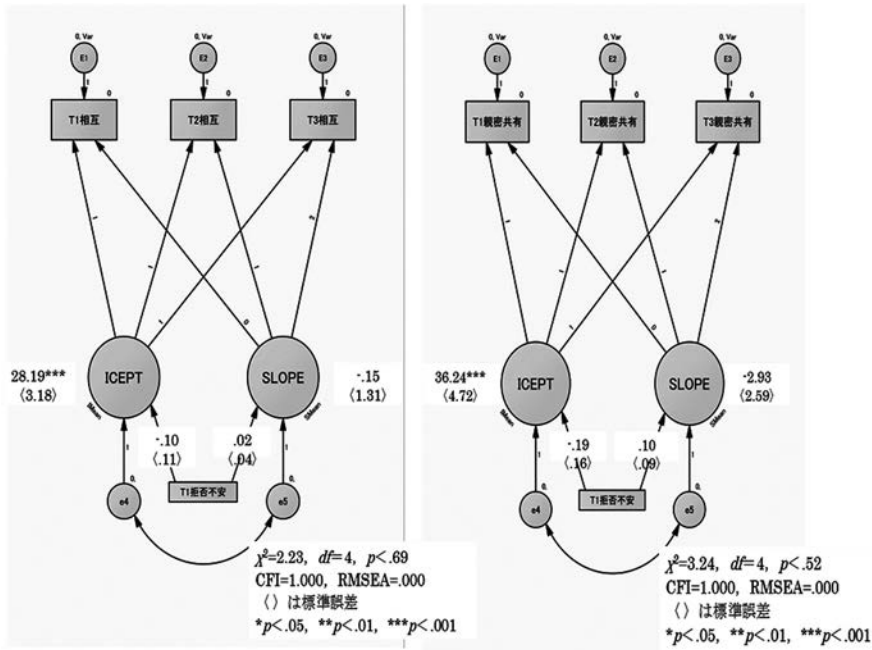


Figure 6 相互理解活動の成長曲線モデル Figure 7 親密共有活動の成長曲線モデル

#### IV 考察

研究1の結果から、大学新生生が感じるであろうと推測していた拒否不安は、入学時に特に感じる不安ではないことが明らかになった。入学直後は、友人との関係性も構築されていないため他人からの拒否に対する不安は生じないことが考えられる。拒否不安を感じるほど取り入れといった外発的動機を持つことが明らかとなった。拒否不安、外発動機づけと友人関係の活動的側面との間には関連は認められなかった。大学1年生の時期は、同じ学年の中で交流を持つ時間が多く設けられているため、コミュニケーション行動の抑制と関連しなかったことが推察される。一方、同一化、内的の内発的動機づけと友人関係の活動的側面との間に、それぞれの時期で関連が認められた。拒否不安や外発的な動機づけはコミュニケーション行動の抑制に関係しないが、より内発的な動機づけを持つことが友人との内面を通じ、時間を共有するような関わりに寄与することが示唆された。特に、入学当初に内発的な動機づけを持つことが親密共有活動の多さに関連することや、時間の経過と共に相互理解活動が増加する傾向を踏まえると、関係構築が始まる段階では、より行動的な相互作用が見られ、次第にお互いを信頼し合い内面を開示するような関わりを増やしていくことが考えられる。西平(1973)が、青年は親密で内面を開示するような関係を通じ、新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されると指摘しているように、学生の健康な成熟を考慮すると、学生自身が入学時の段階から動機づけの持ち方について意識できるよう支援していく必要があると考えられる。

研究2の結果から、入学直後に拒否不安を感じている学生は外的、取り入れの動機づけを持ちやすいが、時間の経過と共に外的、取り入れが減少することが明らかとなった。拒否不安を感じる学生は入学当初、友人との関係構築の難しさが予測されるが、時間の経過を考慮した理解が必要であると考えられる。今後、大学新入生が持つ友人関係への動機づけの変化の様相を検討していくことが必要と思われる。

## 【文献】

- Benesse教育研究開発センター (2010). 第2回子ども生活実態基本調査 ベネッセコーポレーション< [http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu\\_data/2009/](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/)> (平成21年度8月~11月)
- 大坊郁夫 (1993). 親密さの心理学とコミュニケーション 電子情報通信学会技術研究報告 HC ヒューマンコミュニケーション, 93 (345), 33-40.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 藤井義久 (1998). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 東京大学心理學研究 68(6), 441-448.
- 増田健太郎 (2012). 大学生の大学適応を考える - 大学生の主体性を取り戻すために - 教育と医学, 60, 312-323.
- 文部科学省 (2012). 平成24年度学校基本調査(確定値)の公表について <[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/21/1329238\\_1\\_1.](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2012/12/21/1329238_1_1.)> (平成24年度12月21日)
- 内閣府政策統括官 (2009). 第8回青年意識調査 内閣府 <<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>> (平成21年度3月)
- 西平直喜 (1973). 青年心理学 現代心理学叢書 共立出版
- 岡田涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 - 自己決定理論の枠組みからパーソナリティ研究, 14, 101-112.
- 岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 大平健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店.
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替 - 心理的ストレス反応との関連にも着目して - 教育心理学研究, 55, 480-490.
- Ryan, R.M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being American Psychologist, 55, 68-78.

千石保 (1985). 現代若者論：ポストモラトリアムへの模索 引文堂.

社会法人日本私立大学連盟学生委員会. 私立大学学生生活白書2011<[www.wave-int.co.jp](http://www.wave-int.co.jp)> (平成23年度9月)

菅原健介 (1992). 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, 7, 19-28.

杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人疎外感との関係－その発達的变化－ 教育心理学研究, 48, 352-360.

角尾美奈 (2004). 不安が喚起される二者関係の分析 東京家政大学研究起紀要, 44, 219-225.

山田ゆかり (2006). 大学新生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.